關西大學學報

大正十一年六月十五日創刊
昭和十七年十月十日印刷
昭和十七年十月十五日發行
編輯兼發行人　神戸敬民
發行人　大阪市北區堂島上三丁目十五番地
印刷所　西大(72)谷口印刷所
大阪市東淀川區長柄中通二丁目十二番地
發行所　關西大學學報局
會員登錄番號二〇六〇〇四

實踐經濟學の問題

—經濟學の立場被拘束性—

教授　中川庸太郎

如何なる學問でも時代精神、或ひは時代的要請によつて著しく支配且拘束される。特に社會科學の分野に於て此傾向の甚しいのは學問と實生活との相互關係が、他の如何なる科學に於けるよりも緊密且直接である理由に基く。經濟學も亦然りで、時代的に、場所的に夫々特異なる時代精神によつて實生活の目的實現に向つて實踐的に奉仕するやう要請されてゐる。事實如何なる意味にせよ、如何なる角度に於てせよ、學問が常に實生活と遊離せず、生活と共に在るべしといふことについて異論のある筈はない。只問題となるのは、然らば、其實生活とは、其要請の正體とは何んぞやといふことである。

併し茲では是れを問題とせず、只學問といふものは具體的生活の目標、態樣によつて、學問の範圍對度が著しく拘束されるといふこと、而して其被拘束性が必然であり、肯定すべきものであるといふことを認めること丈に止める。茲に學問に携はるものに取つての「立場被拘束性」Standpunktgebundenheit の問題が生じてくる。一つは謂はゞ環境の支配と要請、他は是れに順應奉仕せんとする研究者の信念と態度である。此環境の内でも強力なる拘束性は人々の屬する國家、國民經濟、或は、より大なる生活圏たる世界經濟、世界政治から發起する。かくて時代と場所の特異性は問題を齎し、研究題目に「價値判斷」を促し、研究範圏を定める。即ち學問に實踐性を要求することゝなる。

×

尤もいつの時代と雖も經濟學の實踐性が等閑視された事實はない。只平常時に於ては學問と生活との間隔が稍迂廻的に延長され、一見學問が實生活から韜晦するが如き誤解さへ生ぜしめる。然し此經濟學研究の迂廻的過程は經濟學構造の精致的展回過程であり、其基礎と内容の根本的なる建設過程であつたので、元より研究者の實生活よりの逃避でもなく、學問的遊技でもない。人は往々にして壯麗大伽藍の上部構造のみに目を奪はれ、營々として多年に亘り建設礎石されたる基礎構造を見逃し勝ちである。此基礎構造は、凡ゆる建設物に對しての共通普遍の前提であり、是れは世界性を有してゐる。此比喩は不完全ながら經濟學の基礎理論にあてはまるので、經濟學基礎理論の構成は世界性を有して、或程度萬代不易である。何

第二百三號要目

實踐經濟學の建設……中川庸太郎(一)
紹介と書評……岩崎卯一(六)
學内報……(八)
昭和十七年度卒業生氏名……(九)
校友欄……(一四)

故なれば基礎理論の多くは人類生活に內生天賦なる natürlich 或物から純化されたものが多分に含まれてゐるからである。

×

さて平常時から非常時に至ると此學問と生活との間隔を相對的にせよ、短縮し、學問の實踐性が、より切迫せる事情によつて緊切に要求され始める。然し此生活への奉仕性でさへ、爾來基礎工事として建設されつゝあつた基礎理論を度外視しては到底行はれず、所詮其上に於てのみ實踐されることを銘記すべきである。仮令、統制經濟或は國防經濟に於ても、生產、分配、消費、資本形成等の問題は依然として基本的題目であり、是等一聯の諸過程に作用する諸要因の相互關係、結合關係の理解には（其動機に目的に劃期的なる指導觀念が參加しようとも）依然として世界性を有する在來理論の驅使に俟たねばならない。最近時に於ける世界政治、經濟情勢の變革、西歐流世界觀の凋落、ひいては東亞に於ける新天地の展開、國民經濟主義の世界的潮流等々に掉して日本國民經濟學建設運動が起りつつある。大東亞經濟の確立についての「正しい經濟學」「適切なる獨自の經濟學」研究は當面焦眉の急でもあらう。

×

屢々聲明されてゐるが如く大東亞共榮圈の建設は、其根本的理論として、單に新しきもが舊きものに代るのでなく、質的に相違せる新しき理念が歐米流の世界觀に代るものでなくてはならず、此點東亞獨自の建設精神、政策、方途、技術が案出され、驅使されねばならぬことは自明である。從つて此要請を充すべき獨自の政治經濟學樹立運動も故なきでない。然し、かゝる要請は果して東亞丈に限られたものであらうか。英米及是れの流れをくむ國々に於ける事情を別として（然し、是等の國にも、いつかは）、舊來の生活理念の根本的變革は國際的傾向であり、資本主義的世界經濟變革過程に適應しなければならぬ必然性は東亞に限られたものでなく世界的である。從つて東亞經濟建設の基本精神でさへ、大東亞共榮圈確立の實踐的理論でありながら、一部の人々が唱ふるが如き「神がかり」程度のものでなく、萬國に向つて、萬世に亘つて誇示し得る世界的客觀性を有しなければならない。後世の史家をして失笑せしめる程の單純なるユートピアであつてはならぬのである。東亞經濟の再建といひ、歐亞廣域經濟の建設といひ、夫々獨自の歷史的必然性と個性を有してゐることは言ふ迄もない。然し世界政治經濟の變革過程から考察して相互全く無關係な孤立的現象であるとは絕對に見られず、同一世界生活圈に共に其生活の根源と關聯を有す共通普遍の宿命的な現象である。即ち國民經濟的に、或は地域的に、經濟再建の方途に個性を持ちながら、同時共に普遍性の上に世界的客觀性を持つものでなくては、百年計畫の基礎たり得ぬのである。即ち世界史的な時流の一部分として、世界的なる普遍理論の一共通點として、共に國際性を有しながら、更に適切實踐的に其生活地（領域）に生得の歷史性と理論が必要となる。日本經濟學の建設といひ、東亞經濟再建の學問並に政策といひ、世界の理法と無關聯に建設されるのでなく、世界的諸關聯の上に、其內に建設されなければならぬものである。

×

世界經濟成立以前の事態なら、いざ知らず、今や世界の各地域、各國民經濟の生活は（戰時下經濟に於ける相互に封鎖されたる具体的な或側面のみに囚はれてはならない）既に世界的廣袤を有する生活圈に一世紀に垂々とする共通關聯と結合を有してゐる。現戰時經濟下に於ては、現實に國際經濟の諸關聯と經濟的諸交通の側面に幾多の龜裂が生じてゐる。然し一旦

結ばれたる經濟生活の世界性習性様式、理念には最早や斷切れない連關性が牢固として存在してゐる。其生産、分配、交易の理念、様式には百年昔、數百年の昔に還元し得ない絶對性がある。最早人々は中世紀時代の生活様式に復し得ないのである。人々は絶對に此近代的生産様式から（假令生産を指導する理念に劃期的な變化があらうとも、此生産様式方法其自體を放棄する意味ではない）離れては生活し得ない宿命的なるものにつきまつわれてゐる。此點に各地各國の經濟生活に驚ろくべき普遍性がある。況んや、いつの日かの戰爭終了後、世界經濟の構造に劃期的な變革の豫想される際に於ても、國際間に於ける政治經濟の交流接觸再開は必至である。かくの如く經濟生活の世界的關聯は既に牢固として確立されをり將來も亦其關聯統合の絲の切斷されざる限り、爾來此世界經濟生活裡より、而も人類生活の生得なるものより抽象、純化、典型化されたる經濟理論の不易性も肯定しなければならない。從つて前述せる經濟學の實踐性も、此普遍理論、所謂國籍なき理論の生命と共に、調和の裡にあるべきで、世界性的理論か、實踐的理論かと云が如き二者選擇の意味でなく、共に並存、而も相依存の關係にあり、又此關係にあつてこそ、正しい意味の日本經濟學建設の可能性がある。尤も從來の西歐流經濟學は人々の世界生活、萬民的生活から抽象され、同時に世界生活をのみ專ら對象とする方向に（具體的に言へば專ら英米流生活を對象として）形成され來つた傾向は顯著である。從つて此經濟學の偏曲を矯め、各地、各國の特種事情に順應するやう修正と改編は絶對に必要である。（然し、是れも今更の問題でなく、夙に獨逸に於て、リストを先導者とする所謂歴史學派によつて部分的ながらも、然し資本主義理論に沿ふて、普遍に對する獨自性が尊重されて來つたことは周知の通りである）。

×

此意味に於て國籍なき經濟學の横行しつゝあつた日本の現狀を相當程度に訂正する必要はある。さりとて世界的に是認され、客觀性を有してゐた理論の凡てが無力化したといふ意味では絶對なく、ただ此普遍理論に國籍を付加し、個別と歴史を加味し、更に東亞經濟建設の基本的理念によつて導かれねばならぬといふ程度であることに思ひを致さねばならぬのである。即ち世界的普遍理論と、個別理論（個別理論といふことは言葉の上にて異議があるかも知れない。從つて、それが世界理念と調和する限り、それは世界性を帶びてくる）が不當に對立せしめられるのでなく、調和の裡に並存しなければならない。

×

經濟學が實踐性を有しなければならぬといふことについて何人と雖も異論のある筈はない。特に戰時經濟下に於て、經濟學者も亦能ふ限りの知識を動員し、全力を傾注して國家の急に赴かねばならぬ。戰時經濟の確保、東亞廣域經濟の建設に精根を傾け、負荷の一端を擔はねばならない。然し直接目前の事態に適應するに急にして政策の世界的客觀性を等閑視するやうでは悔を百年の後に殘すこととなるであらう。直接眼前の要求に即應するが如き研究範圍のみが尊重せられ、取上げられる傾向がないかどうかを、端的に言ふならば餘りにも實踐的方面（而も時には技葉末節に走るが如き）の題目のみに集中し、理論研究が等閑視しされる傾向がないか、どうかを十分考へる必要がある。餘りにも近視眼的に目前の現象と要請に捉はれ、かゝる現象の背後に存在してゐるもの、要請なるものゝ眞の意味、要請なるものゝ百年の意味を見失ひつゝあるのでないかを再考する必要がある。

×

世界政治經濟の一大變革期に際し經濟學が志向すべき途として上述の問題は非常に重要なる意味を含んでゐて、到底此機會に盡し得べき問題ではない。問題の水準は更に低下する。然し學問の「立場拘束性」と「日本經濟學の建設」といふことゝ多少共關聯を持ちつつ、研究題目の「重要性價値判斷」といふ點に多少觸れねばならない。世界經濟の一大變革、特に統制或は計畫經濟の出現、自給自足或は廣域經濟の建設運動といふ事と相關聯して相當亂暴な、思慮なき說が行はれてゐる形跡がある。「松茸季節には喰へない蕈も續生する」この言葉通り、學問的素養のない市井人なら兎も角、尊敬すべき專門家(!)の間に於てすら慨歎すべき謬論が行はれてゐるやうである。其代表的なるものゝ內には外國貿易骨董化說であり、景氣變動終止說である。或は資本主義經濟に個有の凡ゆる生活面の消失說である。後者に關しては理想としてなら兎も角、現實性に即して事實を直視する限り、現實經濟生活からかつては資本主義經濟の進展を動機付け、形成せる生得なるものゝ凡ての消失は想像し得ぬところであり、ひいては前述せる世界性理論の持續性云々の問題とも關聯することゝなる。從つて如何に統制、計畫經濟が高められやうと少くとも現實面を直視する限り狹義及純粹なる意味の國民經濟—共同社會的性格を有する道義經濟と、在來の個人主義經濟は永久に並存する。此對立面を調和せしめるのが國家の役目であり、統制經濟の任務である。但し茲では是以上に論及する餘裕はない。

×

然らば統制及計畫經濟の進展と共に景氣變動は終止するであらうか。先づ景氣變動の現象或は其指標 criterion とは何んぞ、此定義に明確な內容を與へて置くことが必要である。簡單に述べると景氣變動の現象とは生產、價格、就業所得、交易等の波動的變化である。然らば何故、かゝる波動的變化が生ずるのであらうか。端的に述べると、生產、所得の分配及方向、消費、資本形成、等の內部相互關係に時空を通じての圓滑なる均衡が期待し得ず、外部的に天災地變、戰爭、人口增加變動、世界市場の政治的變化等を防止し得る方途が絕無であるためによる。所謂外部的原因を兎も角として、內部的要因に完全なる均衡の作用を望み得るであらうか。統制或は計畫經濟は是等の均衡實現に重要なる役割をなすであらう。然し景氣變動の絕滅といふことは、計畫經濟が文字通り完全に實現される場合に限る。言ふ迄もなく是等の波動現象と雖も資本主義生成時代と爛熟時代、凋落時代によつて、其形態には著しい變化があり、今後統制、計畫經濟の進展と共に更に著しい變化が豫想され得る。然し其波動現象が絕滅するに至るべきやは、假令計畫經濟が完璧となり得たとしても、外因的要因は防止すべき手段がない。況んや計畫經濟が完全に實現され得ることなどは絕對に望んで望み得べからざることである。人が景氣を問題とするのは大部分不況期であり、如何にして不況期を脫出すべきかといふことは沈滯期に於て切實の問題となる。人々は好況期に至つて、從來共好況の持續を永續的なものと錯覺し勝ちである。然し現在の好況を支へつゝあるところのものが如何なる性質のものであるか、どの程度に持續し得るものか、如何なる機構の上に置かれてあるあるものかに科學的なる思考を運らす素材を有しない。然し若し一度如何なる基底の下にかゝる生產關係が置かれてあるかに思ひを致すならば—從來の如き無計畫的なる生產機構でないことは勿論であるが—統制計畫經濟の現狀、國防經濟の充實性について思ひ半ばに過ぐるものがある。要之、景氣變動を抑制する相當の機構が存在するといふこ

と、景氣變動が起らぬといふことは別問題である。

×

更に驚ろくべき謬說は外國貿易骨董化說である。目に一丁字なき市井人なら兎も角、相當專門家と目さるるものが是れを言動に表現するに至つて、其輕卒に驚くより正常な頭腦の所在を疑ふ。世界經濟の構造的變化の一局面として國際貿易の動機、樣式、技術方面に相當著しい變化が起つてゐる。加之今次戰爭下とは限らず、今迄共戰時下に於て國際貿易は中斷し勝ちであつた。若し此戰時下貿易中絕の事實を以つて外國貿易終止を言ふならば、學問素養有無の問題より寧ろ常識如何の疑ひである。然し、恐らくそのやうなことはあるまい。從つて是れは問題がないとする。只此際國際貿易は依然存續すべしといふ根據と其依然たる重要性を簡單に明白ならしめるに止める。國際貿易終止或は其重要性喪失を妄信せしめた根據は多分萬民市場の崩壞と相並行する廣域經濟或は自給自足經濟正體把握に戸惑ひしてゐる結果でないかと思ふ。理念的な純粹概念と具體的なる經濟生活は天壞もたゞならぬといふ事は誰しも知るところである。自給自足經濟が文字通り國民經濟生活地を中心としての實現は絕對に不可能であるし、又これあるがために自給自足經濟から廣域經濟形成への必然性がある。だからといつて廣域經濟に於ては國際間の貿易が無用となるのでない。廣域經濟と他の廣域經濟或は他の地域との間に於ける資財交易關係の再開は將來必然である。廣域經濟が擴大伸張し得て地球丈となり得て始めてアウタルキーが其自體の生活地に完全に實現する。このことの不可能なる限り（勿論不可能である）諸生產要因の地域的配在が物理的に偏してゐるのみならず、政治的所屬關係、是れ等を有効に利用し得る開發力も亦國際的に偏在しつゝある。從つて各地、各國が、物理的に、政治的に、經濟的に利用し得る資源の範圍內に生活を屈蹈せしめる雅量？を持たぬ限り、或は又戰時經濟が永劫でない限り、地域間、國際間の經濟接觸の再開持續は必至である。假りに一步を讓り廣域經濟と他の地域、或は國との經濟的接觸が絕滅するとしても、廣域經濟內相互に於ける貿易、資本交流關係は廣域經濟成立確保の絕對條件である。勿論是等經濟接觸の基礎をなす分業生成々立の原因、性格等に相當劃期的な新要因が參加する。其最も重大なるは生產費說に代る道義政治、國防の所謂經濟的要因である（尤も生產費計慮が全然行はれぬといふのでない）。さればとて、此理由に依つて國際貿易其自體の中斷或は重要性喪失を云々するは餘りに輕卒である。若し、以上の如き意味に於ける變化のみをもつて貿易存續或は重要性消失を唱ふることを得るならば、問題はたゞに貿易丈でなく、爾來經濟或は政策の冠せられた殆んど總てのものは經濟生活、ひいては經濟學の埒外に放逐されねばならぬことゝなる。

×

要之、經濟學の日本的再建、大東亞共榮圈確立に奉仕し得る實踐經濟學建設は目下緊急の問題であらう。苟も學に職を奉ずるものは確固たる信念と氣魄を以つて國難に殉ずる覺悟なくてはかなはぬ。然しこの國家的要請を無批判輕卒に受入れ、徒ら心に時流に媚るやうでは、却つて國家の前途を誤ることゝなる。本文を草するに至つた主要動機は、かゝつて以上の如き無謀な言動が一部の有識者間に存在するに非ずやと推察せしめる根據があり、純眞なる學生々徒或は民衆を誤らしめしめんこともあらんかと慮る以外、他意あるのでない。

（一七・九・二七）

紹介と書評

武田宣英博士著「風樹の記」

岩崎卯一

（一）

武田宣英博士は、明治二十二年の關西法律學校を卒業せられた人で、解りやすく言へば、關西大學の第一回卒業生である。今から五十四年前の關西大學を卒業せられた十七名の人々は、大部分物故せられてゐるが、今なほ健かで母校のために何彼と世話をして下さる人のなかには武田博士とともに關西大學の理事をつとめてゐられる黑田莊次郎先生がある。さらに、武田宣英先生は『日本陪審法論』なる學位論文を母校關西大學に提出され昭和三年に法學博士の學位をも得られた學者である。既に古稀の齡に達せられた武田博士がその御夫人とともに執筆し、以て一卷の書册とし、養父五十回忌法要の靈前にささげられたのが、この『風樹の記』と題せられたものである。菊版百五十頁の本で、清楚掬すべきものある裝幀は、武田夫人の手に成ると聞く。

（二）

本書は非賣品である。「本書は一家の私記で、敢て大方の瀏覽に供するものではない。但我家の子孫は、上野家の子孫と共に、熟讀含味することを望みます」（はしがき二頁）との文章が、本書の目的を示してゐる。想ふに、風樹の嘆きを感ぜられる武田博士御夫妻が、仰いで實家武田氏、養家上野氏の先祖の威靈に、感恩の微衷を捧げ、伏しては自己の子孫を庭訓して、奉公の念を新たならしめんとせられたのが、本書の動機であらう。したがつて、今私がここに『風樹の記』について何等か記述し、これを一般の人々に示すことは、或は武田博士御夫妻の本意に沿はないかも知れぬ。しかるに、私が敢てこの筆を執つたのは『風樹の記』の主内容をなせる武田博士の立志修學傳中に、創立時代の關西大學の組織と人々とを記述した貴重な記錄が、充ち滿ちてゐるためである。關西大學は、昭和十一年に創立五十周年記念祝典を擧行するにあたり『關西大學五十年史』を編んだが、將來『關西大學百年史』を編む機會があれば、武田博士の『風樹の記』は、更に資料としての價値を增すであらう。

（三）

この本は『風樹の記』十六篇と『母の再來』九篇と『武田家の人と爲りて』五篇とを以て、組立てられてゐる。これらのうち『武田家の人と爲りて』は、四十年間武田博士に內助の實を示された武田まつ子夫人の筆である。日本古來の夫婦道たる夫唱婦隨の範は、夫人の筆のあとに光つてゐる。

（四）

『風樹の記』は「三人の父と二人の母」とをもつと言はれた武田博士の複雜な家系を、驚くほどの率直を以て詳しく描寫したものである。由來、家系の遠く家門の高きを誇り、時には「系圖買」まで敢てして自己の家格を飾らうとする日本人一般を思ふとき、武田博士の自己家系に關する記述は、眞實そのものである。讀者は、この記述を讀むたびに、武田博士の純情に好意を寄せるであらう。而も、更に武田博士の床しい人柄を偲び得るのは、人物・敎養・氣質・境遇を異にせるこれらの實父母、養父母五人にたいする博士の等しい報恩感謝の念である。養父の鞭といへども、その下にある者の質が「上士」であれば、無上の慈愛として受け入れられ、又役立てられるのである。何れの頁を開いても、そこに現はれる博士の姿は、孝子以外のなにものでもない。

つぎに、武田博士は、小學校代用敎員司法官書生などをしつゝ、法律書を讀み關西法律學校に通つた時代を、細叙してゐられる。故鄕の土佐を脫走し、一人の知人もなき大阪に辿りつき、木賃宿に入つて將來を案じた少年時代の記述は、正に典型的な立志傳である。村上浪六の出世作『當世五人男』の主人公黑田健次がルに化したことは、周知のことがらであるが、武田博士の『風樹の記』を讀みて直に聯想せざるを得ないのは、德富蘆花の『思出の記』の主人公菊地愼一郎のことである。この點何れともあれ、好學の武田少年を救ひ、書生として保護した司法官こそ、關西大學創立の中心人物であつた大阪控訴院評定官井上操氏である。大阪であらゆる仕事から拒絕せられた武田少年が、幾度かの困難ののち、井上操氏の書生になつて、漸く安心した心境を博士は「藤吉郎が信長に初めて仕へたときの心持も斯くやあらんと、感謝と歡喜で胸一杯でした」（三七頁）と書かれてゐる。讀む者はおのづから目頭の熱くなるのを禁じ得ない。博士が恩師にして恩人たる井上先生について書かれたところなどは、襟を正ゝしむるものがある。憲法發布前後における關西法律學校生徒達の氣風も、短い文章ながら、印象的に述べられてゐる。東京に出てから、辯護士試驗を受け、三回目に合格したとも、書いてある。ここで一人前と成られた博士は錦衣故山に歸り、養家の上野家を養父の實子たる弟に讓り、その再興の計を樹立し、自分は廢家と化しようとしてゐた實家の武田家を繼がれたのである。武田家は由緖正しい名家である。

要するに『風樹の記』は、五人の親と一人の恩人とにたいする感謝の記述である。しかし、現在の靑少年が、この本に接することあれば、そのうち資に乏しくも頭腦よく意志かたき幾人かは、必ず自

己を皷舞する何ものかを、このなかに見出すであらう。

（五）

『母の再來』は「過ぎにし七十年は波瀾重疊の生活でありましたが、此處まで無事に漕ぎつけて參りましたのは、一に母の慈愛と加護に依るものであります」（九三頁）との文章に示される母の記事よりも、寧ろ、母の慈愛と加護とにより與へられた最上の內助者、舊名太田まつ子女史、即ち四十ケ年の伴侶、武田まつ子夫人への感謝記である。博士は「私とは反對に裕福に育ち學歷も順當で、其當時の女子としては最高學府を目指して進んだものであります」（九四頁）と言ひ、信州藩士の女であり、女高師の出であり、高女教諭を職とし、三十四歳の一辯護士たりし博士に嫁せられた夫人を述べてゐられる。家計を整理し、多少の貯蓄を割き明治四十年、志を立てゝ獨逸に渡り、ライプチヒ大學で法律學研究二ケ年、後、佛蘭西・英吉利・亞米利加を經て歸朝せられるまでの記述は、久邇宮殿下をはじめ奉り、珍田大使、その他の外交官、山岡萬之助博士その他の學者の知遇を辱うせられた感激を以て、綴られてゐる。これらの記述中にも、まつ子夫人の夫君に對する雄々しき內助と、これに對する博士の感謝とが、明瞭に覩はれる。歸朝後日本パイプ製造株式會社を創立して社長と成り、波瀾を重ねたるも結局成功したるを機會に、再び書齋裡の人たるべく實業界を去られ、學問研究に專念せられた所產が、法學博士の學位論文と成つた『日本陪審法論』一卷である。博士は「生れてより七十年、妻帶して四十年……今日を得ましたのは、亡母の、又亡母の再來たる妻の絕對愛に依るものと信じて居ります」（一二五頁）と書いてゐられる。まつ子夫人の幸福まさに想ふべしである。

（六）

『武田家の人と爲りて』は、まつ子夫人の筆に成り（一）武田家の人と爲りて、（二）家と夫に對して（三）親兄弟親類に對して（四）召使に對して（五）結語に分れてゐる。全部わづかに二十頁の短文ながら、その何れを讀むも、武士の庭訓に育ち、高等教育を享け、女子教育者として精進せられし夫人の人柄が偲ばれる。博士の記述より受ける印象は、常に「高きを望んで」努める男性の意氣なるも、夫人の筆致に依り與へられる感銘は、絕えず「深く省みる」女性のつゝましさである。夫人が「結語」に示された歌一首「我餘生あたには出來し神と人のあつきめくみに思ひ及へは」は、よき子、よき妻、よき母としての夫人を十全に物語つてゐる。

文部省推薦圖書

著者	書名	判型	頁數	定價	發行所
和辻哲郎	倫理學（中卷）	A5	五六六	四・二〇	岩波書店

文部省紹介圖書

下程勇吉	二宮尊德—現實と實踐—	B6	三八六	三・二〇	弘文堂
手塚益德	近代支那教育文化史	A5	四一九	四・五〇	目黑書店
橋本進吉	古代國語の音韻に就いて	A5	一三五	一・六〇	明正堂
岡田章雄	南蠻宗俗考	A5	三〇三	三・五〇	地人書館
伊藤正德	國防史（現代日本文明史第四卷）	菊判	四九八	三・二〇	東洋經濟新報社

日本出版文化協會推薦圖書（八・九月發表のもの拔萃）

讀者層	編著譯者	書名	判型	頁數	定價	發行所
一般教養	武田祐吉	古典の精神	B6	三四八	二・〇〇	創元社
教養	土屋文明	旅人と憶良	B6	二八〇	一・七〇	創元社
同	小林碧	南方圈の資源マレー篇	A5	二四八	二・五〇	日光書院
同	相川宏秋	海の資源	B6	二一九	一・六〇	天然社
同	知切光藏	宇都宮默霖	B6	三九四	二・五〇	日本電報通信社出版部
同	井出季和太	華僑	B6	三六二	二・五〇	六興商會
同	守谷秀亮	開國より維新へ	B6	二五〇	二・〇〇	秋津書房
同	幸田成友	日歐通交史	A5	四一四	四・五〇	岩波書店
教養專門	橋本造吉	古代國語の音韻に就いて	A5	一五三	一・六〇	明世堂書店
同	和辻哲郎	倫理學（中卷）	A5	五六六	四・二〇	岩波書店
同	大塚一郎	企業の生產量に關する研究	A5	四九二	四・八〇	弘文堂書房
專門	平塚益德	近代支那教育文化史	A5	四一九	四・五〇	目黑書店
同	立作太郎	米國外交上の諸主義	A5	三七八	三・八〇	日本評論社
教養	石井柏亭	日本繪畫三代志	B6	二四一	一・八〇	創元社
一般教養	北川桃雄	法隆寺（改訂版）	B5	二三四	五・八〇	アトリエ社
教養	大平洋貿易研究所譯	濠洲の政治經濟構造	B6	二一八	一・八〇	富山房
同	平賀貞	轉換期農政策の指標	A5	四一七	四・三〇	嚴松堂書店
教養專門	石田幹之助	歐米に於ける支那研究	A5	四八八	五・五〇	創元社
青年	大塚彌之助	山はどうして出來たか	B6	二七三	一・二〇	岩波書店
專門	土岐善麿	田安宗武	A5	七九二	七・五〇	日本評論社

學内報

軍人援護に關する 勅語奉續式

十月三日は軍人援護に關する優渥なる勅語下賜の記念日に當るを以て、學部に於ては正午威德館に於て、豫科は正午より豫科講堂に於て、專門部一部は正午より、二部は午後六時專門部講堂に於て夫れ夫れ奉讀式を擧行、聖旨を奉體して大東亞戰爭完遂に遺憾なからんことを銘記した。

大學高專學徒 聯合演習參加

十月七日及び八日の兩日攝河の山野に於て文部省主催文部大臣統監の下に大學高等專門學校學徒野外聯合演習實施され本學より神戸學長以下教職員、學部、豫科、專門部第一部の最高學年學生生徒名參加し、戰時下における軒昂たる學徒の意氣を示した。

昭和十七年度卒業式

本年度卒業式に於ける學長式辭の要旨

×

本日茲に學部第十九回專門部一部十一回、專門部二部第五十五回卒業式擧行に當り一言式辭を申述べます。

先づ以て來賓の各位には本日の雨の中御多忙の處を御出席下さいまして一段の光彩を御添へ下さいましたことを感謝致します。今回卒業證書を授與しましたものは學部二八七名、專門部一部二二一名專門部二部は七三八名の多數であります。その中で一部のものは社會に出て社會的訓練を受けた者もありますが、多數の者は純眞な學徒生活をつゞけて來たものであります、何卒御指導、御支援賜はらんことをお願ひ致します。

父兄の方には子弟の教育上に種々御苦心なされたことと思ひますが、ここに首尾よく實を結ばれたことは御滿足のことと御祝辭を呈します。

さて卒業生諸君には夫れ〳〵高等專門の學科課程を了へ卒業證書を手にせられたことは、多年の螢雪の功によるものでありまして心より御祝辭を申上げます。多數の諸君は不日軍務に服せらるゝ大事な責任をもつものであります、どうか御自愛御自重の上立派に御奉公なされんことを、武運の長久をお祈り致します。

さて諸君は學校を卒業されたが、凡そ學校の卒業は學業の完成、終止を示すものではなく、學問の一階梯、一段落に過ぎない。學問を應用する才能あれば益々研究の道を得た譯で、現在に足れりとせず、廣く讀み、深く考へて自ら創意を加へ、自ら消化し、向上なさることを期待します。今後社會に出ると幾多の試驗があり、世間の人は皆試驗官であることを忘れてはならぬ。學内の試驗は寛大なものであり、慈愛深いものであるが、世間の試驗は易しいものではない。一層勉强して油斷なく奮勵努力してもらひたい。

次に學校の教學の精神をしつかり腦裏に入れておいて貰ひたい。學校は單なる知識を授けるのではなく、より高い精神――報國の精神を打込みつゝある。單言すれば、御民吾れの精神、大君の民であることを自覺し、お國の爲、大君の爲に死生を超越して働くことである。われ〳〵は生れ乍ら國を愛する精神をもつてゐる。皇紀二千六百年の光輝ある歷史を有する萬邦無比の日本國に生れたことは何と云ふ光榮であり、幸福であることか、昨年十二月八日の大東亞戰爭勃發してより戰果は擴大したこと驚くべき程である。何とも云ふに云はれぬ感激をもつものである。諸君は春秋に富み、共榮圏の中核として、誠に努力のし甲斐がある報國の大精神を頭に叩き込んで頂きたい。

更にこれを實踐實行に當つて大切なものは敢闘精神である。强敵を恐れず、小敵を侮らず、勇往邁進するところに報國精神が生きてくるのである。敵國米英は物資に惠まれた國である。古いがねばり强い國である。吾々は總力を擧げて國家に奉仕せねばならぬ。

しかし戰ひに强い丈けが日本精神ではない。强い半面、和かい靜かな半面のあることを忘れてはならぬ。古來物のあはれを知ることは日本武人の特徴である。敵兵の屍を懇ろに葬つて花を捧げる臭床しさがある。遠慮深く、一人を愼しむと云ふ靜かな道德が養はれて來てゐる、この日本固有の道德はこれを殘し、生かしてゆきたい。

只當面の最大の問題は强敵に對して擊碎するの力强さをもち、天與の大使命を完遂することであつて、積極的に行動し國家の要請にいよ〳〵奮起しなければならぬ。

要するに卒業はこれで學業の完成と考へず、愈々研鑽の心を忘れず、報國の精神を念頭において、戰線たると銃後たるとを問はず敢闘精神を以て職域に奉公し身體を鍛錬し、國家に對する最高の義務を認識してその遂行に邁進することである。折角皇國のために自重自愛して頂きたい。

がくほう抄

▽森川教授　大阪市國民貯蓄奬勵調査委員會委員に依囑さる。

昭和十七年度卒業生氏名

◇法文學部

法律學科（一〇九名）

天野正巳（愛知）
東三郎（兵庫）
淺野嚴（大阪）
阿部敬二郎（德島）
安部文一（大分）
池田兼憲（和歌山）
今中隆賢（和歌山）
入田順雄（大阪）
伊藤信治（大阪）
井上伊和時（鹿兒島）
伊藤武夫（大阪）
石川之久（大阪）
岩倉一雄（大阪）
井手籠正夫（鹿兒島）
池地尊重（高知）
江河武昭（長崎）
大松良行（大阪）
大津權作（兵庫）
奥村博三（大阪）
河野治雄（鹿兒島）
勝原睦夫（福岡）
川嶋實三重
川村太郎（滋賀）
片岡一男（奈良）
加茂三郎（德島）
川上新太郎（福岡）
金山正信（愛媛）
北川檜雄（大阪）
衣川誠（京都）
金在永（朝鮮）
清川博正（朝鮮）
舗本正清（大阪）
黑田健太郎（大阪）
桑原守也（三重）
倉貫重治（京都）
中橋與（松石川）
黑飛博（廣島）
鶴熊本（仁部利夫（大阪）
沼田正路（熊本）
農野寛融（大阪）
栗谷好雄（大阪）
窪田仁德（大阪）
發正治（大阪）
國本治（朝鮮）
原田憲雪（香川）
東原和夫（香川）
小林薫（大阪）
佐々木滋德（島）
平松健松（高知）
酒井行直（岡山）
藤原義行（兵庫）
藤永國隆（和歌山）
藤田雅夫（兵庫）
松井正吉（奈良）
間崎良英（福岡）
馬淵昌之（大阪）
松本義貞（兵庫）
南靜（和歌山）
三浦一雄（兵庫）
谷山寅雄（朝鮮）
谷口嘉（兵庫）
村井薫（大阪）
三毛敏治（和歌山）
西村直（大阪）
橋本三彦（島取）
松下溜（鹿兒島）
奥田籌夫（愛知）
西川澄（島根）
永野壹榮（高知）
中島靖夫（大阪）
並川浩（大阪）
德久敏（大阪）
長谷川誠三（京都）
滨本泰治（島取）
花桝重雄（兵庫）
野村正德（京都）
野口信武（福岡）
西光健次（兵庫）
西村末治（兵庫）
中谷壽夫（滋賀）
中橋與（松石川）
富島利夫（德島）
寺倉金夫（岐阜）
安田良一（大阪）
山崎庄次（大阪）
山田博（大阪）
山田弘（島根）
吉村榮治（奈良）
大西直逸（大阪）
小澤幸夫（島根）
小野修一（大阪）
瓦谷好次（大阪）
金谷保男（大阪）
柏原壽夫（兵庫）
北村薫（高知）
喜多宗一（兵庫）
久德進（岡山）
久光幹男（大阪）
船引庸三（兵庫）
藤條聽一（愛知）
堀本正雄（愛媛）
山田義康（德島）
中島輝弘（長崎）
山崎通夫（岡山）
有井與（市大阪）
前田利（奈良）

政治學科（二三名）

赤羽正義（大阪）
朝倉成萬（朝鮮）
伊藤六祐三（重）
梅村勉（愛知）
加堂實（大阪）
梶靜雄（大阪）
加茂儀（市德島）
加藤道宣（和歌山）
岩井清和（兵庫）
高橋勝次（廣島）
千原啓治（大分）
辻隆雄（京都）
靄田武（大阪）
寺口義幸（大阪）
一階弘吉（大阪）
稲垣一男（大阪）
岩朝太郎（德島）
岩越賢福（井）
須磨研一（兵庫）
小谷義一（大阪）
片岡公明（朝鮮）
須田喜三男（石川）
田中忠雄（兵庫）
田中正巳（千葉）
馬渡俊邦（兵庫）
泉森嘉一郎（大阪）
道家誠之（大阪）
島飼整治（兵庫）
武內幸雄（大阪）
平崎一雄（兵庫）
高崎綾（大阪）
谷克巳（德島）
高橋政則（山形）
瀨島滲（岡山）
鈴木淳三郎（大阪）
末藤光男（佐賀）
鈴木勛（新潟）
嶋三雄（大阪）
清水迪（愛知）
清下西清（朝鮮）
三重寶（大阪）
佐伯五郎（岐阜）
齋藤達郎（宮城）
入江功二（大阪）
有田勝美（大阪）
青山正信（岡山）
東澄（大阪）
有重榮（山口）
荒木達雄（大阪）
安藤義夫（大阪）
井上政一（大阪）
井料嘉三郎（鹿兒島）
井上清（兵庫）
伊藤篤（兵庫）
池田信一（山形）
井上敏雄（兵庫）
岩井清（兵庫）
伊藤信（大阪）
井上伊（和歌山）
伊藤武（大阪）
石川之（大阪）
岩倉一（大阪）
井手籠（兵庫）
池地尊（高知）
江河武（長崎）
大松良（大阪）
大津權（兵庫）
奥村博（大阪）
河野治（鹿兒島）
勝原睦（福岡）
川嶋實（三重）
川村太（滋賀）
片岡一（奈良）
加茂三（德島）
川上新（福岡）
金山正（愛媛）
北川檜（大阪）
衣川誠（京都）
金在永（朝鮮）
清川博（朝鮮）
舗本正（大阪）
黑田健（大阪）
桑原守（三重）
倉貫重（京都）
中橋與（石川）
黑飛博（廣島）
鶴熊本（仁部利（大阪）
沼田正路（熊本）
農野寛融（大阪）
栗谷好雄（大阪）
窪田仁德（大阪）
發正治（大阪）
國本治（朝鮮）
原田憲雪（香川）
東原和夫（香川）
小林薫（大阪）
佐々木滋德（島）
平松健松（高知）
酒井行直（岡山）
藤原義行（兵庫）
藤永國隆（和歌山）
藤田雅夫（兵庫）
松井正吉（奈良）
間崎良英（福岡）
馬淵昌之（大阪）
松本義貞（兵庫）
南靜（和歌山）
三浦一雄（兵庫）
谷山寅雄（朝鮮）
谷口嘉（兵庫）
村井薫（大阪）
三毛敏治（和歌山）
西村直（大阪）
橋本三彦（島取）
松下溜（鹿兒島）
奥田籌夫（愛知）
西川澄（島根）
永野壹榮（高知）
中島靖夫（大阪）
並川浩（大阪）
德久敏（大阪）
長谷川誠三（京都）
滨本泰治（島取）
花桝重雄（兵庫）
野村正德（京都）
野口信武（福岡）
西光健次（兵庫）
西村末治（兵庫）
中谷壽夫（滋賀）
中橋與（石川）
富島利夫（德島）
寺倉金夫（岐阜）
安田良一（大阪）
山崎庄次（大阪）
山田博（大阪）
山田弘（島根）
吉村榮治（奈良）
大西直逸（大阪）
小澤幸夫（島根）
小野修一（大阪）
瓦谷好次（大阪）
金谷保男（大阪）
柏原壽夫（兵庫）
北村薫（高知）
喜多宗一（兵庫）
久德進（岡山）
久光幹男（大阪）
船引庸三（兵庫）
藤條聽一（愛知）
堀本正雄（愛媛）
山田義康（德島）
中島輝弘（長崎）
山崎通夫（岡山）
有井與（市大阪）
前田利（奈良）

文學科英文學專攻科（五名）

江藤知壽（福井）
田茂夫（岐阜）
嶋崎金次（福岡）
西中丈夫（和歌山）
村上政雄（廣島）

同哲學專攻科（一名）

佐藤眞守（長野）

經商學部

經濟學科（九八名）

有田勝美（大阪）
青山正信（岡山）
有重榮（山口）
荒木達雄（大阪）
安藤義夫（大阪）
井上政一（大阪）
井料嘉三郎（鹿兒島）
井上清（兵庫）
伊藤篤（兵庫）
池田信一（山形）
井上敏雄（兵庫）
岩井清和（兵庫）
岩越賢福（井）
岩朝太郎（德島）
稲垣一男（大阪）
一階弘吉（大阪）
須磨研一（兵庫）
小谷義一（大阪）
片岡公明（朝鮮）
加藤道宣（和歌山）
加茂儀（市德島）
梶靜雄（大阪）
加堂實（大阪）
梅村勉（愛知）
伊藤六祐三（重）
赤羽正義（大阪）
朝倉成萬（朝鮮）
伊藤篤（兵庫）
高崎綾（大阪）
谷克巳（德島）
高橋政則（山形）
瀨島滲（岡山）
鈴木淳三郎（大阪）
末藤光男（佐賀）
鈴木勛（新潟）
嶋三雄（大阪）
清水迪（愛知）
清下西清（朝鮮）
三重寶（大阪）
佐伯五郎（岐阜）
齋藤達郎（宮城）
入江功二（大阪）
有田勝美（大阪）
青山正信（岡山）
有重榮（山口）
荒木達雄（大阪）
安藤義夫（大阪）
井上政一（大阪）
井料嘉三郎（鹿兒島）
井上清（兵庫）
伊藤篤（兵庫）
池田信一（山形）
井上敏雄（兵庫）
岩井清和（兵庫）
高橋勝次郎（廣島）
千原啓治（大分）
辻隆雄（京都）
靄田武（大阪）
寺口義幸（大阪）
一階弘吉（大阪）
稲垣一男（大阪）
岩朝太郎（德島）
岩越賢福（井）
須磨研一（兵庫）
小谷義一（大阪）
片岡公明（朝鮮）
須田喜三男（石川）
田中忠雄（兵庫）
田中正巳（千葉）
馬渡俊邦（兵庫）
泉森嘉一郎（大阪）
道家誠之（大阪）
島飼整治（兵庫）
武內幸雄（大阪）
平崎一雄（兵庫）
高崎綾（大阪）
谷克巳（德島）
高橋政則（山形）
瀨島滲（岡山）
鈴木淳三郎（大阪）
末藤光男（佐賀）
鈴木勛（新潟）
嶋三雄（大阪）
清水迪（愛知）
清下西清（朝鮮）
三重寶（大阪）
佐伯五郎（岐阜）
齋藤達郎（宮城）
堀本正雄（愛媛）
山田義康（德島）
中島輝弘（長崎）
山崎通夫（岡山）
有井與（市大阪）
前田利（奈良）

福井信男（兵庫）
寳來彦治（大阪）
堀岡泰次郎（兵庫）
松尾鍾（大阪）
松葉孝（愛媛）
松尾哲治（長崎）
増田好秀（大阪）
深山靖俊（熊本）
南正人（岡山）
村上義計（滋賀）
本山幸男（山口）
森本眞三（大阪）
山澤泰（愛媛）
八十田清造（大阪）
山本眞一郎（大阪）
山澤廣司（富山）
山田直記（奈良）
余島弘（廣島）
渡邊嘉弘（大阪）
原繁（佐賀）
能勢鉊信（京都）

商業學科（五一名）

天野正（大阪）
乾文雄（大阪）
井上義次（三重）
岩本治一（島根）
岩本諭一（和歌山）
上原三郎（鹿兒島）
上霜達雄（大阪）
内田行（徳島）
江崎譯保（大阪）
江郷光郎（大阪）
遠藤精三（山形）
大室雅彦（岡山）
大島隆三（大阪）
川島慶太郎（大阪）
河内啓三（大阪）
加藤禎一（大阪）
垣内恒夫（兵庫）
角本通也（兵庫）
北薗近（鹿兒島）
北田法璋（兵庫）
木下正一（岡山）
小寺弘（大阪）
島田繁（兵庫）
島谷直治（大阪）
杉本敬彰（徳島）
田仲嘉久（奈良）
武田建一（和歌山）
田中義一（大阪）
塚本收（石川）
寺見利一（岡山）
當舍三七楠（大阪）
中川藤一（和歌山）
中村久夫（廣島）
永松均（福岡）
林嘉幸（大阪）
東野清（大阪）
二見豐一（大阪）
古川憲夫（鳥取）
松田眞一郎（大阪）
松本直人（大阪）
宮田一良（福井）
森本鎭（大阪）
山崎訓司（愛媛）
山野井幸男（大阪）
泰永茂（大阪）
山下登志男（大阪）
安井慶一（大阪）
安田吉實（朝鮮）
吉岡嘉裕（大阪）
渡邊敏雄（岡山）
和田泰祐（福岡）

專門部一部
法律學科（三八名）

尹柱海（朝鮮）
長谷川徹（山口）
萩家大藏（大阪）
西浦登三（大阪）
新田正雄（奈良）
豐田稔（京都）
荻野誠造（大阪）
奥野博（京都）
荻田弘（大阪）
岡本拓（大阪）
小野勝（岡山）
渡邊洋（大阪）
神垣忠幸（廣島）
茅原靜馬（山口）
片岡秀夫（大阪）
勝部英明（兵庫）
吉田正（大阪）
高橋正國（兵庫）
田村進一郎（高知）
長田年弘（兵庫）
中井義友（大阪）
八木亮三（香川）
山本隆業（大阪）
山本喜代三（廣島）
山口義爾（兵庫）
丸尾武彦（兵庫）
松本秀明（朝鮮）
元琪祚（朝鮮）
深田保美（大阪）
近藤隆（大分）
赤松政雄（大阪）
佐野勇（靜岡）
雜古嶸（兵庫）
金奉林（朝鮮）
金海政吉（朝鮮）
新坊博一（奈良）
森泰雄（兵庫）
毛利淑彦（兵庫）

經濟學科（六八名）

牛那賢三（鳥取）
長谷川英次（兵庫）
速水一郎（大阪）
坂東敏武（徳島）
濱田茂（大阪）
西村正雄（奈良）
西原勳（朝鮮）
新田辰夫（兵庫）
本郷一臣（兵庫）
尾島貫一（靜岡）
大山喜久（兵庫）
渡邊哲之介（愛媛）
河合平二（大阪）
片山勉（廣島）
樫本孝三郎（和歌山）
吉永敏夫（兵庫）
吉川朝治（大阪）
吉原景春（朝鮮）
高野吉雄（兵庫）
田川公一（大阪）
田中正文（長崎）
田端彌一郎（石川）
田中茂（大阪）
添田一秋（福岡）
土口升（兵庫）
津田算平（和歌山）
根木孝（大阪）
根木義務（岡山）
長田清二（大阪）
中村力（兵庫）
中川宗次郎（香川）
中井博和（大阪）
梅澤誠治（兵庫）
内海志賀夫（大阪）
上野有郎（熊本）
倉田陽吉（岡山）
熊田盛三（大阪）
黒田博（大阪）
山本宏（島根）
大和博（大阪）
八木優（香川）
松井道夫（大阪）
福田德三郎（大阪）
福本年廣（廣島）
福島壽太郎（大阪）
藤田茂樹（和歌山）
藤井茂（兵庫）
藤文人（大分）
小泉博（兵庫）
小祿良典（愛媛）
鄕地尙俊（高知）
小走修作（奈良）
驪城顯雄（大阪）
寺井義信（大阪）
天羽久彌（徳島）
佐々木明（岡山）
佐藤敏夫（大阪）
北野喜久夫（大阪）
北田勉（兵庫）
三好大八郎（岡山）
三村研（岡山）
繁田甲象（靜岡）
島田武夫（京都）
平野桂造（大阪）
森本利之（大阪）
森谷德二良（大阪）
森川周（兵庫）
菅野辰次（大阪）

商業學科（一一五名）

飯塚禮一（島根）
今井末廣（鳥取）
石田茂（大阪）
井本武雄（和歌山）
石井正文（大阪）
伊藤一郎（三重）
井尻義一（和歌山）
井上洋藏（兵庫）
岩元勳（鹿兒島）
池田謙三（大阪）
越後正市（北海道）
原口一雄（兵庫）
萩田時彦（大阪）
長谷川銀一郎（大阪）
原來左右（兵庫）
波多野義一（岡山）
西岡鵄（岡山）
西萩俊穗（兵庫）
西田八郎（兵庫）
西川寬（大阪）
荷宮朗（大分）
仁興滿雄（大阪）
西山廣美（兵庫）
堀內明弘（大阪）
大江神一（廣島）
小野三曹（廣島）
大竹榮（岐阜）
小倉勳（大阪）
大內孟（鹿兒島）
大橋新三（東京）
奥山敏夫（兵庫）
岡正章（大阪）
渡邊道男（兵庫）
加藤敏威（兵庫）
神末榮夫（大阪）
鴫田政之（兵庫）
片山泰正（大阪）
河村雅吉（山口）
神谷肇（兵庫）
吉田宇平治（奈良）
吉田達（兵庫）
吉岡薫（佐賀）
吉村清三（大阪）
横山亮一（和歌山）
横田宏一（大阪）
横白晋（和歌山）
吉田禮助（佐賀）
太宰修三（愛媛）
高井剛（兵庫）
竹中武（京都）
谷山守節（兵庫）
立石純一（兵庫）
谷川實（愛知）
高木鷹夫（大阪）

瀧見毅（福井）
田窪義孝（愛媛）
高原永柱朝鮮
十河保治香川
土屋庚三廣島
中原勝大阪
中島宮春大阪
中島久綱大阪
中井精彦滋賀
中島松男滋賀
永露乙耶福岡
村上章大阪
村岸眞滋賀
宇都宮隆一愛媛
國木敏雄廣島
山田良男兵庫
山崎洋大阪
矢切誠三岡山
矢野秀治大阪
八尾野滿兵庫
八木喜久男愛知
牧和男大阪
丸山清奈良
蒔野恐大阪
増田通香川
眞鍋守愛媛
古谷松太郎大阪
藤原健次兵庫
福本圭介山口
福園實長崎
小林武男大阪
駒井昌雄大阪
惠澤泰治東京
寺田實大阪
秋山林平京都
赤木章人岡山
荒井英太郎（神奈川）
安東敏夫兵庫
赤塚圭助大阪
淺井勳鳥取

阿部博愛（愛媛）
阪上博和大阪
澤田由太加大阪
橋本敏夫（和歌山）
林伊三男岐阜
林酒井
林田義春京都
阪谷進岡山
佐藤勉廣島
相根勝大阪
花岡芳夫大阪
片岡康幸大阪
金田重明兵庫
川瀬衛兵庫
川野祐造大阪
角木勝三兵庫
土山利一大阪
土屋保大阪
長綱三郎岡山
中尾正史廣島
中谷茂樹和歌山
長崎芳雄大阪
馬淵幸治大阪
眞壁繁雄大阪
山本通信岡山
山田三好滋賀
山崎晃大阪
山西次郎德島
山崎卓彌大阪
豐大阪
長谷英作（滋賀）
笠井和夫京都
笠井清大阪
稔大阪
土山利一大阪
辻田喜盛（和歌山）
土橋俊二栃木
土屋造兵庫
松本一郎廣島
西田登大阪
吉岡壽三廣島
檜崎進吾大阪
中本照規廣島
松浦勝英大阪
槇塚正大阪
増岡鶴一大阪
増田榮夫三重
松崎正義兵庫
前田隆弘奈良
眞下正美京都
松井勇三重
松山元則和歌山
深田佐次郎大阪
福岡三夫廣島
福場鼎廣島
藤田和男大阪
藤澤馨大阪
淵崎孝男兵庫
藤井稔岡山
藤浪德夫岡山
藤居誠雄滋賀
古岡贊義朝鮮
藤近司岡山
越尾二郎岡山
兒島本次大阪
紺家稔奈良
小林友太郎（鹿兒島）
小宮逸夫三重
小寺正武大阪
小林好兵庫
小島信勝石川

田榮弘（三重）
和田榮造兵庫
井和夫京都
井清大阪
川野祐造大阪
川瀬衛兵庫
金田重明兵庫
片岡康幸大阪
中尾政史廣島
中谷茂樹和歌山
長崎芳雄大阪
馬淵幸治大阪
眞壁繁雄大阪
山本通信岡山
山田三好滋賀
山崎晃大阪
山西次郎德島
山崎卓彌大阪
豐大阪
長谷英作（滋賀）
笠井和夫京都
笠井清大阪
稔大阪
土山利一大阪
辻田喜盛（和歌山）
土橋俊二栃木
土屋造兵庫
松本一郎廣島
西田登大阪
吉岡壽三廣島
檜崎進吾大阪
中本照規廣島
松浦勝英大阪
槇塚正大阪
増岡鶴一大阪
増田榮夫三重
松崎正義兵庫
前田隆弘奈良
眞下正美京都
松井勇三重
松山元則和歌山
深田佐次郎大阪
福岡三夫廣島
福場鼎廣島
藤田和男大阪
藤澤馨大阪
淵崎孝男兵庫
藤井稔岡山
藤浪德夫岡山
藤居誠雄滋賀
古岡贊義朝鮮
藤近司岡山
越尾二郎岡山
兒島本次大阪
紺家稔奈良
小林友太郎（鹿兒島）
小宮逸夫三重
小寺正武大阪
小林好兵庫
小島信勝石川

專門部第二部

法律學科（二六一名）

伊與良雄（福井）
入野昌志岡山
泉良輔德島
岩谷寅治鳥取
岩田榮三郎兵庫
井口二郎岡山
生駒茂次（和歌山）
井上清大阪
糸川正太良三重
今中喜二郎大阪
長谷川善治郎大阪
早曾純男大阪
林鉞滋賀
濱利一郎大阪
飯島茂平千葉
石原保信岡山
大津九一郎大阪
奥野俊輔大阪
岡邦平岡山
富永孝雄德島
戸田義弘大阪
土井博靜岡
富澤忠義鳥取
堂浦正男（和歌山）
上木正隆福井
植竹健兵庫
大橋新滋賀
和田定吉高知
大揚庸夫廣島
大野賢藏兵庫
大森幹雄大阪
大島忠義香川
小倉俊三郎兵庫
丘澤彌三郎兵庫
沖廣正人廣島
尾下勇一郎奈良
岡田昇香川
田中茂三重
田中隆一大阪
田中昇香川
竹崎芳造高知
竹村好夫大阪
久保田利夫長崎
倉崎豐德島
栗原紹雄大阪
熊田卯三郎大阪
野村重雄石川
野間正義大阪
内田吉衛岡山
植村文雄大阪
瀧昌雄大阪
高田一郎大阪
丹治要兵庫
富永敏明愛媛
吉村義雄大阪
吉田弘雄廣島
室田努島根
村田敏男富山
村上源治郎福井
上田孝久（奈良）
上野忠一（京都）
上田讓大阪
梅本章山口
高橋哲雄愛媛
高田明夫大阪
高時保大分
柳井正雄岡山
栗原二三男山梨
高見繁兵庫
谷口幸男兵庫
谷口武福井
山口忠一福井
山田寛大阪
山田正夫滋賀
山本昇一兵庫
山田節士（京都）
八木敏雄滋賀
山田忠嗣奈良

瀧見毅（福井）
田窪義孝（愛媛）
高原永柱朝鮮
十河保治香川
土屋庚三廣島
中原勝大阪
中島宮春大阪
中島久綱大阪
中井精彦滋賀
中島松男滋賀
永露乙耶福岡
村上章大阪
村岸眞滋賀
宇都宮隆一愛媛
國木敏雄廣島
山田良男兵庫
山崎洋大阪
矢切誠三岡山
矢野秀治大阪
八尾野滿兵庫
八木喜久男愛知
牧和男大阪
丸山清奈良
蒔野恐大阪
増田通香川
眞鍋守愛媛
古谷松太郎大阪
藤原健次兵庫
福本圭介山口
福園實長崎
小林武男大阪
駒井昌雄大阪
惠澤泰治東京
寺田實大阪
秋山林平京都
赤木章人岡山
荒井英太郎（神奈川）
安東敏夫兵庫
赤塚圭助大阪
淺井勳鳥取

阿部博愛（愛媛）
阪上博和大阪
澤田由太加大阪
橋本敏夫（和歌山）
林伊三男岐阜
林酒井
林田義春京都
阪谷進岡山
佐藤勉廣島
相根勝大阪
花岡芳夫大阪
片岡康幸大阪
金田重明兵庫
川瀬衛兵庫
川野祐造大阪
角木勝三兵庫
土山利一大阪
土屋保大阪
長綱三郎岡山
中尾正史廣島
中谷茂樹和歌山
長崎芳雄大阪
馬淵幸治大阪
眞壁繁雄大阪
山本通信岡山
山田三好滋賀
山崎晃大阪
山西次郎德島
山崎卓彌大阪
豐大阪
長谷英作（滋賀）
笠井和夫京都
笠井清大阪
稔大阪
土山利一大阪
辻田喜盛（和歌山）
土橋俊二栃木
土屋造兵庫
松本一郎廣島
西田登大阪
吉岡壽三廣島
檜崎進吾大阪
中本照規廣島
松浦勝英大阪
槇塚正大阪
増岡鶴一大阪
増田榮夫三重
松崎正義兵庫
前田隆弘奈良
眞下正美京都
松井勇三重
松山元則和歌山
深田佐次郎大阪
福岡三夫廣島
福場鼎廣島
藤田和男大阪
藤澤馨大阪
淵崎孝男兵庫
藤井稔岡山
藤浪德夫岡山
藤居誠雄滋賀
古岡贊義朝鮮
藤近司岡山
越尾二郎岡山
兒島本次大阪
紺家稔奈良
小林友太郎（鹿兒島）
小宮逸夫三重
小寺正武大阪
小林好兵庫
小島信勝石川

小泉正夫（大阪）
明山一夫（大阪）
芦田英雄（京都）
安部宏（大阪）
阿部信明（大分）
赤星博典（熊本）
淺田正實（兵庫）
赤尾武馬（山口）
阪野三治（大阪）
坂本次男（岡山）
佐藤元之（岡山）
佐々木豐一（大阪）
佐藤哲四郎（和歌山）
櫻井茂（大阪）
坂井嘉壽雄（京都）
佐藤弘剛（三重）
佐野義春（兵庫）
佐々木章夫（大阪）
齋藤徹宗（大阪）
澤田稔（大阪）
笹井紀男（大阪）
金元龍（朝鮮）
北氏長治郎（兵庫）
淸原利男（兵庫）
木野本賢三（兵庫）
來田新次良（兵庫）
岸誠一（島根）
岸本英三（兵庫）
金本芳治（朝鮮）
湯川春雄（兵庫）
雪本修造（大阪）
三原茂男（兵庫）
宮崎秀夫（靜岡）
宮脇弘司（兵庫）
水谷秀一（大阪）
三隅寅之輔（山口）
三野薰（長崎）
宮城邦夫（大阪）
三國得夫（大阪）
三浦博和（鹿兒島）

三宅泰二（山口）
宮崎友人（熊本）
宮武忠男（大阪）
三好智（愛媛）
三木伊佐雄（兵庫）
箕田繁（滋賀）
下岡英次郎（大阪）
淸水敏男（大阪）
淸水政治郎（大阪）
白川實（香川）
城江正男（兵庫）
芝田義一（和歌山）
庄司逸人（三重）
神馬恒一（靑森）
神野宜信（愛媛）
七里三之助（長崎）
日比野庄作（滋賀）
平田光三（大阪）
廣本洪木（朝鮮）
森山盛正（高知）
森內忠次（大阪）
許村勇臣（朝鮮）
千葉世鳳（朝鮮）
關口昇（東京）
瀨田宗一（和歌山）
赤口秀德（熊本）
住田金夫（大阪）
鈴木正夫（大阪）
鈴木信夫（和歌山）
鈴木良男（愛媛）
鈴木重敏（兵庫）
住友英雄（廣島）
住田學（廣島）
森茂雄（愛媛）
岡部重信（奈良）
小西昌市（石川）
淺利大吉郎（大分）
芝池懿太（大阪）
若野傳一（大阪）
渡邊俊三（靜岡）

立山實（鹿兒島）
竹村英男（長野）
森島忠三（京都）
森作夫（奈良）
湊本辰雄（大阪）

經濟學科（一四〇名）

池上貞治（兵庫）
伊藤保（奈良）
飯田實（奈良）
岩崎光雄（滋賀）
石川尙三（大阪）
入井政行（富山）
今村榮男（福岡）
伊藤善一（岡山）
岩倉善明（和歌山）
石本正巳（和歌山）
礒野信夫（兵庫）
井上久司（兵庫）
石崎準吾（鳥取）
石黑達郎（富山）
春名俊介（兵庫）
林田昇（大阪）
林收（大阪）
橋本一夫（德島）
芳賀敏光（大阪）
坂東英雄（兵庫）
仁頃廣次（大阪）
西川喜代松（大阪）
仁木庄三郎（德島）
西畑繁（大阪）
堀田淸俊（富山）
本田博（愛媛）
鳥井三郎（大阪）
寅島哲夫（大阪）
千葉繁人（大分）
緒方長太郎（山口）
大前治（兵庫）
尾上幸生（兵庫）
太田新作（大阪）

岡本勳（大阪）
岡田三郎（大阪）
大西重夫（大阪）
太田嘉和（大阪）
岡馬新一（石川）
尾本平太郎（京都）
大江權五（大阪）
大西彰（滋賀）
桶谷義博（奈良）
大塚博三（岡山）
渡邊桂治（岡山）
渡邊判一（大阪）
若光明（鳥取）
臨田廣繁（大阪）
加賀山淸行（愛媛）
加藤統理（德島）
川淵弘保（大阪）
片山勝（兵庫）
堅田隆夫（大阪）
瓦谷廣三（京都）
櫻原重美（大阪）
養老美雄（廣島）
吉村淸三（奈良）
吉川信彦（奈良）
谷口毅（和歌山）
田中悅二（兵庫）
田淵行三（大阪）
多田一郎（大阪）
橋英三（大阪）
田宮勇（大阪）
高橋桃雄（新潟）
谷村忠雄（大阪）
增辻啓治（大阪）
武田俊三（大阪）
高橋源市（廣島）
高島種三（大阪）
谷健二（兵庫）
高木重敏（大阪）
辻本正義（兵庫）
辻憲一（大阪）

中川政春（兵庫）
仲善治（大分）
中村光男（兵庫）
成瀨國十四（兵庫）
中西佳壽男（和歌山）
內藤豐昌（兵庫）
中野達生（兵庫）
中尾重保（大阪）
長田安弘（朝鮮）
中野敏一（大阪）
植田滋（大阪）
臼淵工（石川）
內海拾次（兵庫）
野村龍雄（福井）
農士忠明（大阪）
野口守也（兵庫）
久保義明（大阪）
桑原幸夫（兵庫）
久米俊雄（香川）
安松克巳（香川）
山田秀太郎（三重）
山口正雄（京都）
山田稻雄（滋賀）
柳生輝美（香川）
安武春雄（大阪）
山本拓司（兵庫）
松本新藏（兵庫）
增田牧夫（岐阜）
前野秀夫（兵庫）
松本純孝（大阪）
松田義德（宮崎）
藤ノ井榮三（京都）
船津泰基（兵庫）
藤井信雄（奈良）
藤井正男（鳥取）
藤井範明（愛媛）
藤本四郎（兵庫）
後藤幸雄（廣島）
幸田重雄（奈良）
江頭茂男（兵庫）

赤松則典（廣島）
足立富義（島根）
青山利一（大阪）
佐々木正一（大阪）
佐々木信夫（大阪）
佐藤忠彦（山形）
笹川壽一（大阪）
佐久間正純（大阪）
北村嘉幸（大阪）
岸田辨藏（大阪）
喜多正利（大阪）
雪廣泰一（兵庫）
南一男（滋賀）
水野裕夫（靜岡）
宮崎康（新潟）
三宅正巳（兵庫）
志賀廣藏（和歌山）
塩川滋（靜岡）
重本庸（德島）
下田宏造（石川）
披田宏（德島）
平山雄基（朝鮮）
鈴木醇一（大阪）
鈴木傳一（和歌山）
杉山保平（靜岡）
宮川甚吉郎（大阪）
中山憲一（岡山）

商業學科（一八〇名）

稻垣泰三（大阪）
井上博造（大阪）
井上薰（兵庫）
岩田實（大阪）
伊坪信研（大阪）
今北員弘（兵庫）
岩淵秀三郎（大阪）
今西三郎（兵庫）
板垣光夫（德島）
稻葉正雄（奈良）
岩田泰次（岐阜）

乾石（大阪）
井上賞則（宮崎）
稲田貞雄（新潟）
入江吉一（大阪）
飯田尚生（岡山）
端野吉一（大阪）
播井隆夫（兵庫）
橋本茂明（徳島）
濱田充四郎（大阪）
濱田源一（香川）
濱部一男（鳥取）
及金淳（大阪）
服部弘（大阪）
長谷部正臣（大阪）
板東武三郎（兵庫）
濱岡好路（香川）
畑悦二（兵庫）
牛田誠二（兵庫）
西岡博義（岡山）
西代通島（根）
西尾照雄（大阪）
仁子祥（大阪）
仁熊士郎（兵庫）
西田義信（兵庫）
西口種男（兵庫）
細川源己知（兵庫）
堀口正輝（奈良）
堀内喜雄（長野）
法土義郎（大阪）
土佐忠（大阪）
朝永豊（佐賀）
戸田修一（徳島）
友部義久（香川）
栃谷正（富山）
近田唯志（廣島）
近松正雄（大阪）
流郷治（岡山）
湿品四郎（山口）
大成二郎（大阪）

大井和夫（大阪）
大崎富士雄（和歌山）
岡田正雄（徳島）
岡田鍵太郎（廣島）
大橋正（岡山）
岡口澄雄（岡山）
高西輝雄（大阪）
瓜生清（福岡）
上田繁（奈良）
上田清一（京都）
上田吉數（大阪）
上原榮一（兵庫）
梅本方二郎（京都）
上田秀一（大阪）
上田嘉治（大阪）
植田明次（兵庫）
前川義一（福井）
松元英一（宮崎）
松下武文（兵庫）
松岡巍（大阪）
松阪好（岡山）
松尾奈良（福井）
松田政行（兵庫）
松本勝一（大阪）
松本明夫（大阪）
松永邦衛（岡山）
佐々木敬（大阪）
佐々木一雄（大阪）
佐藤正太郎（愛知）
佐々木勇（愛媛）
足立芳邦（大阪）
芦田力（岡山）
浅野祐作（大阪）
秋田政雄（兵庫）
阿田子久司（兵庫）
寺東勇（大阪）
寺田和忠（福井）
寺田久男（大阪）
手島忠博（福岡）

田代信清（大阪）
田中倫（大阪）
田中勝治（和歌山）
田村芳雄（大阪）
田邊武（滋賀）
田本實之助（兵庫）
高橋賢吉（愛知）
高木繁夫（大阪）
高原博三（大阪）
辰巳洋次（大阪）
竹田修（兵庫）
竹谷和夫（兵庫）
高嶋廣安（奈良）
田邊益之（大阪）
高橋啓輔（鳥取）
黒敏勇（兵庫）
國末享（岡山）
藤本漠（大阪）
船井武雄（京都）
榮井宗一（兵庫）
酒井敏一（大阪）
酒井修（大阪）
坂本勝市（徳島）
坂本實（兵庫）
坂田文治（和歌山）
齊藤千代松（山口）
佐藤志郎（長野）
貞光利一（朝鮮）
藤原嘉夫（岡山）
藤川廣海（兵庫）
福田德男（兵庫）
藤田弘（和歌山）
北川勘三郎（大阪）
藤原正（兵庫）
木下保夫（兵庫）
木村正（兵庫）
木元久夫（兵庫）
木村宗雄（大阪）
木谷重夫（大阪）
木村宗一（香川）
北埜正（兵庫）
木内博（徳島）
北田公夫（大阪）
木原繁義（廣島）
三谷正（大阪）
三宅茂（香川）
三上雄（滋賀）
道下雄（香川）
宮本悟（大阪）
宮崎成行（富山）
宮本爰（滋賀）

中塚一郎（香川）
賴晉哉（大阪）
村田善次郎（大阪）
松尾繁（奈良）
松本定雄（大阪）
松尾唱夫（兵庫）
柾木好一（大阪）
前田愈一郎（大阪）
太郎東（京）
秋田政雄（兵庫）
祐作（大阪）
岡山
山口擴平（京都）
山下留吉（兵庫）
山本定雄（大阪）
寺東勇（大阪）
寺田和忠（福井）
寺田久男（大阪）
福岡

中川（香川）
中谷義雄（大阪）
中川守喜（高知）
中尾義一（奈良）
中田嘉男（大阪）
中川一雄（香川）
長藤武夫（山口）
中村馨一（高知）
中野周一（兵庫）
中澤正彥（兵庫）
中野勝見（兵庫）
津山光一郎（大阪）
津萩健三（兵庫）
辻久雄（大阪）
津野知三（和歌山）
象忠一（大阪）
田中基市（兵庫）
田方重雄（兵庫）
谷口喜代治（兵庫）
田中正章（岡山）
田村房雄（兵庫）
高畑保雄（大阪）
高嶋啓輔（鳥取）
田邊益之（大阪）
黒澤五郎（兵庫）
久保田貞次郎（佐賀）
福井治郎（奈良）
福田德男（兵庫）
藤田弘（和歌山）
藤本仙太郎（大阪）
柳原正夫（奈良）
山根房人（島根）
山根寛（滋賀）
山根賢（京都）
山本隆次（香川）
八木正道（大阪）
山本仙（鹿兵）
山本治（大阪）
山本鑾（兵庫）
小濱晃三（大阪）
中村武治（岡山）
小城四郎（鹿兒島）
小山島一（滋賀）
藤吉榮（福岡）
蕪池博和（大阪）
小松利夫（北海道）
北埜正（兵庫）
木村宗一（香川）
木谷重夫（大阪）
木村宗雄（大阪）
木元久夫（兵庫）
木村正（兵庫）
木下保夫（兵庫）
北川勘三郎（大阪）
藤田德男（兵庫）
藤原嘉夫（岡山）
藤川廣海（兵庫）
福田德男（兵庫）
福井治郎（奈良）
福井通夫（大阪）
福井武雄（京都）
藤本漠（大阪）
藤吉榮（福岡）
小山島一（滋賀）
小城四郎（鹿兒島）
小濱晃三（大阪）
中村武治（岡山）
小寺精吉（兵庫）
小島利夫（福島）
小松利夫（北海道）
北田公夫（大阪）
三谷茂（愛媛）
近藤茂（愛媛）
小西文雄（兵庫）
小林信行（靜岡）
小峰賢一（大阪）
海老原良夫（栃木）
江草三四治（廣島）
遠藤峰雄（大阪）

島井範男（高知）
信田知三（大阪）
新谷脇太郎（石川）
執行喜次郎（大阪）
四宮伊左夫（京都）
神農武典（朝鮮）
澁江富雄（兵庫）
平田勉（廣島）
樋本安男（岡山）
兵藤彦一（愛知）
平松一馬（東京）
平山清八郎（大阪）
樋口一良（大阪）
平塚拓治（岐阜）
森岡重一（大阪）
森一之（長崎）
守屋勇（岡山）
毛利幹男（愛知）
守井進（福井）
森潔（德島）
道廣（岡山）
菅元彦（廣島）
杉本弘行（大阪）
角野亥三郎（大阪）
杉本信一（大阪）
鈴木清繁（大阪）
鈴木友一郎（大阪）
諏訪次郎（兵庫）
峠旭（和歌山）

文學科國語漢文專攻科（三九名）

入佐憲正（鹿兒島）
橋本三郎（奈良）
西川大治（大阪）
西村貞三（和歌山）
富田恭一郎（兵庫）
遠竹徹（鹿兒島）
近田正男（兵庫）
小井保（大阪）
大西久一（兵庫）
河西善三郎（香川）
加藤準道（愛知）
米澤俊夫（奈良）
田中正治（大阪）
竹内定雄（大阪）
瀧典通（德島）
田淵實夫（廣島）
中井哲彌（兵庫）
中西甚太郎（兵庫）
長濱行治（大阪）
瓜生田圓（大分）
窪田豐（愛媛）
藪田次男（大阪）
山内庸一郎（大阪）
山口良太郎（兵庫）
山本敏男（兵庫）
松本正太郎（大阪）
藤仲敏夫（廣島）
金春信高（奈良）
淺井鐵治（石川）
櫻井俊次（兵庫）
澤田之宏（奈良）
木下榮一（大阪）
岸田榮三郎（大阪）
三宅良一（德島）
白野信三（大阪）
柴田五郎（京都）
久岡太郎（廣島）
森山清正（兵庫）
山本正歲（兵庫）

文學科英語專攻科（一八名）

今枝鈴男（岐阜）
服部正一（兵庫）
仁田順三（兵庫）
田中權四郎（大阪）
田中京二（京都）
谷口重敏（大阪）
根岸寬群（馬）
楠敏勝（大阪）
神庸司（大阪）
升岡榮（大阪）
藤岡英輔（富山）
兒玉登（兵庫）
北憲左右（和歌山）
三木清（大阪）
清水和喜（和歌山）
塩本重松（大阪）
下山健三（兵庫）
本井明郎（京都）

校友欄

秀麗會

（關東州支部）

平井

▽**第七十五回例會**　七月十八日午後六時半より海務協會にて開催、常連の木村光頭氏は日本刀鑑定のために姿を見せず、萩原、川野そのほか事故續出で十一名の會合となる。しかし人數こそ少くとも和氣横溢、時事問題を中心に甲論乙駁で愈々面白い。ひとしきり銃後國民の更に一段の緊張を要望して熱論し、話は中々終點に達しないが午後九時すぎ學歌を高唱して散會。

出席者　高濱、室山、秀島、池内、北條、高階、豐永、永田、小川、荒川、澎湃を展開し、さては故國日本を展開する。平井幹事會場選定の困難を訴へ良策を募る、迷案のみ、殘念乍らいつもの海務協會案に落ちつく。

當日の出席者―高濱直一、木村儀八、室山宇太郎、高木嘉一郎、守谷賢治、秀島全治、前川嘉一郎、松本茂、伊達弘、平井三郎、萩原博、池内輝一、早川源四郎、加來茂彦、北條茂義、貴村一雄、永田淺雄、豐永吉廣、荒川彌一郎、小川立朝、竹若隆三

▽**第七十六回例會**　八月十八日午後五時半常磐莊に開催、會する者二十名、常磐莊主人の好意で此頃には珍らしい日本間を提供して呉れたので一同大喜び、時間嚴守もまあ上々と云ふ處、暑い時節に肉鍋でもないのだが大いに食慾を滿たさうとあつて老も若きも子供にかへつて大いに語るには十分な雰圍氣、この大殿堂もつい最近迄は華やかなシャンデリヤの下に都下の名流が蝟集したであらう社交場、今もその名殘りは其處此處に止めてゐる。

さてこんな處で暗い相談が出る筈がない、思ひ〳〵の得意話しに朝鮮を展開し

上海支部

八月例會　午後六時半より日本倶樂部に於て例會開催、國民儀禮ののち協議にうつり、忽那氏支部長辭任の件はこれを承認、大森氏提案通り次期支部長は幹事會一任に決定、いろいろ話題に花を咲かせて午後九時散會した。本夕は浙東作戰に從軍中、要務を帶びて上海に歸られた手島氏の出席あり、新鮮有益なる話に傾聽する事を得た。

出席者―忽那、辻野、大森、槇塚、高岡、高木、手島

九月例會　四日午後六時卅分より日本倶樂部三號室にて開催、地理的に出席不如意の梶川氏、細川氏等の參集を得て近來稀れに見る熱に充ちた會合であつた。

當日の附議事項は左の三項であつた。

一、會員の慶弔は支部に通告すること、支部は適當なる方法を以て敬意を表すること。

二、中秋明月觀賞會を杭州に開催の件

三、支部基金積立の件

出席者―忽那、梶川、藤木、辻野、細川、手島、谷口

鹿兒島支部

支部長森藏吉氏逝去後の支部の役員は左記の通り決定した。

支部長　桑原　義隆
副支部長　山口　顯次
幹事　谷田部十郎　佐藤　鶴松
　　越智　祐男　塩川　德藏

尙事務所は鹿兒島市武町一一九、桑原義隆方（電話四七六）

會員消息　越智祐男君逝去支部より供華弔意を表す。服部覺助君去る十一月廿三日逝去。橋本利八君鹿兒島稅關支署長より陸軍司政官として南方に赴任、去る九月十九日送別の宴を催す。

會員消息

氏名下の數字中、漢字は大正年數、算用數字は昭和年數を16前は三月、16後は十二月卒業を示す、又括弧内にある消息は業務動靜

大法

稲田　定治（5）東京市長崎町二ノ一四ノ二
荒川彌一郎（15）（滿鐵古巢第三埠頭局貨物助役）
有田　末雄（14）芦屋市打出丸山八
伊藤　正紀（16前）芦屋市芦屋青年學校内（同校教諭）
棘　惠麟（10）東京市板橋區板橋町一〇ノ三一六七（精密機械統制會社）
今岡　琢磨（10）神戸市葺合區役所稅務課長）
内山　勇（12）（川崎重工業會社艦船工場勞務課）
片田　彰夫（7）布施市中小阪六五九
川上　嘉三（16前）上海江西路一三五號瀧華洋行内（同社）
河野省三郎（14）（滿洲國興安西省公署實業廳殖産科）
木下　清（18）池田市才田四三九ノ一
木村　定雄（8）（大阪府管工事工業組合）
木村　恂三（14）（陸軍々屬）
小西　賴人（6）京城府漢江通二ノ三五九、進昌洋行内（同行）
島津　義信（12）滿洲國錦州市紫明區櫻花街、東綿紡織會社内（同社）
高田貫左右（五）（陸軍司政官）
高見　實（10）住吉區天王寺町三五一一（鐵鋼統制會）
竹内　千一（13）（纖維製品輸出振興會社大阪支店）
谷坂　正一（7）住吉區北田邊町六八四
友井伊三郎（9）東淀川區淡路新町二〇（大阪遞信局業務部郵務課）
中西　芳雄（11）滿洲國鞍山市、昭和製鋼所内（同製鋼所總務部庶務課）
中野　一雄（7）住吉區北田邊町二〇九
中林光太郎（14）（滿洲國吉林市、吉林省公署省長官房）
中村　毅（14）豐中市岡町櫻通三丁目（神戸海務局港運課）
西堀　正男（5）埼玉縣北足立郡蕨町旭町四ノ四六（日本金屬工業組合主事）
福川　壽（12）新京特別市、開拓總局土地處管財科内（同局）
藤原　龜夫（16前）中河内郡久寶寺村久寶寺二一九一（東第二商業學校教諭）
細見　順三（10）兵庫縣由良町紺屋町（由良要塞司令部主計中尉）
武良　操（一五）東區谷町二丁目官舍
村田　幸雄（10）豐中市岡町二二
籾井　一（11）上海閘北民德路、華中鐵道會社内（同社業務部輸送課）
森下　善雄（9）（東京芝浦電氣會社大阪出張所）
森本　德雄（11）（東亞海運船舶海務課）
山本　雅男（13）住吉區遠里小野町七四
結城　丙太（8）北區梅ヶ枝町八四
吉田　彰（12）尼崎市塚口池田一二二一ノ六六

大政

赤城　浩朗（14）滿洲國間島省延吉縣延吉街、滿洲帝國協和會延吉縣本部内

大文

井川　竹盛（16前哲）蒙古自治邦政府錫林郭勒明公署内（同署）

大經

奥田　秀行（16前）滿洲國牡丹江市東區積善街、滿鐵黎明塾一一三號（滿鐵牡丹江鐵道局營業部業務課）
貫村　一雄（14）大連市聖德街三ノ一三八ノ五
金守　雲（13）朝鮮咸南、咸興稅務所
小早川　繁（16後）佐賀市興賀町妙安寺内（唐津商業學校教諭）
財木　三郎（9）神戸市兵庫區切戸町五六〇
杉本　二一（12）住吉區喜連町二二二九（日本タオル製造統制會社企畫課）
寺下　惠雄（16後）大分市長池町二一六
綠莊アパート内
西田　克己（16後）北區天滿橋筋六ノ三
西田　裕亮（5）武庫郡鳴尾村小松鳥居前五（大阪府燒物商業組合聯合會）
增田　財（16前）堺市永和一ノ五七

大商

井村　達雄（16後）（昭和銀行大阪支店）
伊東　祐一（3）（高千穗電氣會社支配人）

改姓名

昭16專二經　池田　正作　小島　正作
昭12專二法　藤本　宗一　神山　宗一
昭15專一法　梁基夏　梁本　基夏

訃音

井上　萬藏（昭6大經）去る六月逝去
後藤　延治（昭5大法）大阪朝日新聞一宮支局長、去る九月二十四日逝去遺族、南區高津十番丁、藤原力松方、後藤喜代子夫人
高岡　正治（昭16專一商）於滿洲戰死の旨十月一日公報を受く、遺族兵庫縣川邊郡中谷村差組、父高岡吉松殿
中井　武（昭16專二法）去る九月八日於中支戰病死、遺族泉北郡福泉町三木閉一二、父中井角太郎殿

關西大學學報　第二百三號　（昭和十七年十月十五日發行）

新刊

關西大學研究論集

第十二號

昭和十七年九月發行
A5判　定價各壹圓
送料十五錢

法律・政治篇（一六七頁）

國家研究の立場……岩崎卯一
行政處分の瑕疵について……中谷敬壽
財産罪の構造……植田重正
經濟統制法令における「販賣」の意義……野村次夫
家督相續人の廢除の本質……福島四郎
改正民法をめぐる若干の問題……柳瀨兼助

經濟・商業篇（一八〇頁）

臺灣産業論……磯部喜一
大東亞共榮圏建設と交通問題……河村宜介
黑海及びカウカズ地方が歐洲新秩序に占むる地位……中村良之助
最近に於ける支那の財政……三谷道麿
我國の銀行統制の進展……森川太郎
イギリス帝國主義の特質……矢口孝次郎

文學・哲學篇（一八七頁）

廟制考（其の二）……岡本勝治郎
苗族劄記……高橋盛孝
ニイチエとシエーラー……武内省三
師と弟子
—ニイチエ「教育者としてのショウペンハウエル」についてのノート—……菅守常
苦悶する現代英文學……片岡甚太郎
カンタベリー物語序の歌……廣瀨捨三

關西大學學會
大阪市東淀川區中通二
振替大阪一二八七五番
電話堀川一〇三九番